一六七　（一七九八）　寛政十年六月　前橋郡奉行所の社倉積穀大意〔A〕

社倉積穀之大意

8215
99-2

一土と国穀を守る神と社神とも地神とも云其社神に
穀豊熟と祈て祭日を社日と云春秋両度有る也春分の
の穀成就と祝て秋分の穀豊熟の感謝と祝て祭其日を
社日と云り其社神のために蔵を建置を社倉と云倉八今の
米蔵の事なり春の社日より其年の穀成就と祝て先麥作を
取作初穂を社神に備い心得を諸おの苑を表出置を則
村毎穀者に拠て年社倉元金の利潤を以買穀の事ハ或

社神に備奉ることなく汲々の事故　上の物を敬なく下の物を卑
社神に相備ひとのとおもひ得仮令不作ひとの義意をもふ他おもの穀
と成し小前一統の誠と盡し論とこと右穀の内より売麦一二タ年
とと先社神に相備ひ余は藏に積置てより先達と逐一ア実作通
社倉　御取立願い　御意を分一ヒ年飢饉の時社倉を
開くとの穀物とん窮民とも救の為とるとの村方に為
の事なる飢饉回振の為儀ワ人くとふ年に得ん方の為に右積穀
御貸渡一方し只村々老人より困窮及び國富民常の為に
思召上る寛政三庚戌年始る社倉　御なる取建ん事なる平生の
何の心為用浦見に得出ん年の為に何程と浪と食物無
作らん今日の露命とそなへ見ん事に為ん穀よ出る寶ん
大切物と心得穀の真加とて為事に専右の　御意とん為
御世話社倉積穀　給作事に得ん右の余事に違ん義為
厳重に為年　給作に用雇者安心いて　御意とおもふ民

一已くのよ厳密に成り永久相續の心掛専一に豊年を續の得ハ價を
厚く相成まつつ穀と粗末に成り金銀とのと大切に成候に
あらい去よ俗に自然と穀の冥加と忘れ流行に対地神の憐も
落冥加も盡て申い誘ふも渇きぐるに井と掘晴天よ雨具と備と若
渇く井と掘雨よ降く雨具と求時に其急難と防事あるいぶれ
如く常に富み時ハ貧富をづつ有し事に別々人命と救穀物
急得る紙ハ必ずと忘れ永久安民の基人に已ず為ず成候て

池沼ふく穀物と囲置申事に社倉年々豊に成候に成候
必年飢饉よ逢い迎飢餓死よ及ぶ事ハ有し間敷人々安堵と成候
事に社倉の缺合を以社神とあがめ奉り一筋に穀の冥加と
存ぜん地神の加護産神の冥恵と叫び年々穀豊熟して
子孫永久よ栄の程よ成又貧困窮の者も非常の富有
末の頼も出来申ん領中恵百姓　市政の法　市實意の
荒増書附申上作条に振小前一統に可申聞候

右社倉相續之大意ニ一村一和之藩令に有之藩ハ萬
事に響ハ永久安民の基ニ可相成ニ付日待ハ小祭
一統お集ニ節ハ村役人ニ不絶為讀聞ハ可申者也

寛政十戊午年六月　　前橋
　　郡奉行所

前書之通古来社倉ニ彰規　市取立之村々ハ聞ハ
其村々儀ニ先市領主ハ社倉積穀之訣合積ハ聞成
有之ハ藩ニ小百姓ニ其ニ承知可申ニ藩ハ橋赤
去ル戌年より元金ハ貸附ニ成別段事　思召ニ成
市執法ニ遵　市立作事ニ付其村々儀ニ前書之通
相守日待ハ小祭一統お集ハ前ニ村役人ニ不絶